

木工

木工は、それ自体が長い歴史を持つ多様な工芸品であるが、漆器、籠細工など多くの工芸品の重要な構成要素でもある。1970 年には、正式にその重要性が認められ、重要無形文化財に指定された。

日本列島の気候や地形は、木工に適した多種多様な種類の在来木材を育み、縄文時代（紀元前 10,000-400 年）の木製品の遺物が発掘されている。時が経つにつれ、道具や技術が高度化し、美術品や建築物も複雑化していった。現在では、木工は芸術の一大分野として認識されている。

その技法は、「指物」「刳物」「曲物」「挽物」の 4 つに大別される。いずれも、切り出した木が温度や湿度の変化で反ったり割れたりするため、木の性質を熟知した職人が必要だ。

石川県では、漆器とともに木工が発達しており、漆器の下地（ベース）は木が一般的である。山中漆器のように木目を生かしたものだけでなく、金沢や輪島のように漆を厚く塗り、装飾を施したもので、木地がきれいに整っていることが必要不可欠である。

氷見晃堂（1906-1975）、川北良造（1935-）、灰外達夫（1941-2015）など、石川県から木工芸の重要無形文化財保持者が数人誕生している。